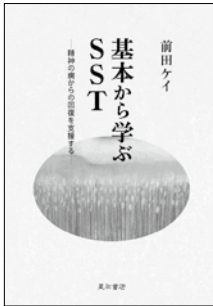


■ 書 評



基本から学ぶ SST—精神の病からの回復を支援する—

前田ケイ 著
星和書店
2013年7月
352頁, 定価 2,730円

「…はい。…なるほど。…今のあなたのセッションはやさしくて、一見思いやりがありますが、当事者にとっては最も役に立たない関わりの1つですね。」

これは、数年前、本書の著者が講師を勤める SST ワークショップにおいて、教科書をなぞるようなロールプレイをした参加者への指導の一言であった。

この書評を書く私も精神科病院で SST を実践していて、著者の前田ケイ氏の教え子の一人に当たる。わが国が戦後の復興へと、ようやく向かい始めた時期、著者は最新のソーシャルワークを学ぶため、いち早くアメリカへ渡り、クライアントへの関わりについて、当地の実習中心のカリキュラムで学びとり、帰国後は職種を越えて、支援者への指導を続けている人物である。著者はどんな立場の人にも気さくに接する方だが、本書の中で「人を助けたいという熱意や優しいところさえあれば、だれでも福祉の仕事ができると思っている人は少なくないが、私の考えは違う。互いに助け合い生きて行こうという決意、人と社会についての専門的知識、知識を現実に応用する能力が必要だ。」と述べている通り、専門家としての信念からの指導は明確で鋭い人である。冒頭の指導の言葉を横で聞いていた私にも思い当たる節はあり、胸を針で突かれたような一言だった。

SST とは social skills training の略で対人行動学習が必要な人に使われる 1 つの技法で、グループあるいは一対一での面接の形で行われている。

SST がロバート・リバーマンにより、日本に伝達されすでに 25 年が経過しており、このアプローチに関する書籍は多数出版されている。その現在、著者はあえて本書をもって、基本から改めて紹介している理由について、前書きで、最近の日本の精神医療の現場に

において SST の形式だけがまねられ、あたかも、マナー教室で「正しい常識」を皆でまねる様相となり、当事者が実際の社会生活の中で生かす結果につながらない支援が散見されるため、時には志ある医療関係者から、SST が誤解され批判される現状へ一石を投じるためと、SST を使う精神障がい当事者、家族、そして専門知識を持たない市民、これから学び始める学生にとっても、SST が実際どのように行われ、当事者のリカバリーに役立つのか、的確に具体的に理解ができて、かつ平易な表現で説明されている教科書の必要性を感じたためと記している。

その著者の思いの元、本書の構成は、1 章：ある当事者のリカバリーへの過程 2 章：SST の用語の解説 3～4 章：なぜグループアプローチを行うか？ グループセッションにおける具体的なテクニック、5～6 章：SST を行う準備とセッションの進め方、7 章：記録（カルテ）の書き方、8 章：家族支援、最後は 1 章を受けてか、著者自身の人生と専門家としての歩みがエッセイとして掲載されている。

一般市民にも理解可能な平易な表現で記されているが、対人支援のために必要な正確性は削がれていない。網羅的な表現ではなく、SST を実施する上で、勘違いされている部分、意外に難しい部分に焦点を当てた記載と章立てのため、表現の優しさと裏腹に実践的な内容になっており、SST に限らず、集団精神療法や、病棟、デイケアでのグループの立ち上げ運営、組織の中で新しい企画を立ち上げるためにも有用と考えられる。また随所に SST を使った当事者、著者をはじめとする支援者が多数、登場するエッセイが配置され、読み物としても飽きさせず、SST によって、人生に新しい物語が紡ぎだされる場面が読み取れる。本書は SST の基本というより本質が書かれている。読み終わると、著者とともに SST で練習をした当事者の方と、SST で変わった支援者たちの笑顔が見えるようで、著者が好んで用いる「希望」の 2 文字が脳裏に浮かんでくる。一方で、SST の本質をいまだに著者を含めたごく限られた実践者しか語ってないのではないのか？ という疑問もある。SST を必要とするすべての人へ、この技法が提供される医療福祉の時代の到来こそ著者の願いであるが、はたして現在はどうか？ 鋭くも実に的確な著者の一言が、私にはまた聞こえてくる気がする。

(今村弥生)